

高知県立大学、地域に学び成長促す 長戸和子教授に聞く

2024/04/11 05:00 日本経済新聞電子版 1178文字

高知県立大学が看護師などの国家資格や就職率で高い実績を誇っている。文化、看護などの4学部で1学年の定員は340人だが、就職率は99%で、6割を占める県外出身者のうち高知で就職する学生も少なくない。地域活性化につながる優れた人材をどう育てているのか、学生部長の長戸和子教授に聞いた。

——大学の特徴や強みはどのようなところにありますか。

「大学の源流は1945年に発足した県立女子医学専門学校だ。49年に前身となる県立高知女子大学となり、52年に全国で初めて4年制の看護学科を設置した」

「看護学部では全国でも珍しく、看護師のほか保健師や助産師の受験資格が得られる。学生全員が受験し、ほぼ全員が合格する。特に看護師と助産師は合格率100%だ。2種類の資格を持つため、養護教諭として学校で応急処置

ができたり、ライフイベントに合わせて看護師から保健師に職種を変えたりすることができる」

——他の学部も国家資格で高い合格率を誇っています。

「社会福祉学部は2022年度実績で、社会福祉士の現役合格率が87.1%で全国4位だった。精神保健福祉士が94.4%で3位、介護福祉士は100%で1位になった。健康栄養学部の管理栄養士も全国平均が9割弱のところ、当学は約95%だ」

「学部ごとに学年担当の教員を数人置いている効果大きい。少人数のため教員が個々の学生の性格を把握している。1、2年生は学期ごとに、3年生からは毎月個人面談を行い勉強の仕方などをきめ細かくサポートしている」

——県外から入学し、高知県内で就職する学生も多いと聞きます。

「15年に『域学共生』という理念を掲げた。大学が地域を変え、地域が大学を変えることを意味する。高知は全国と比べて高齢化で10年、人口減少で15年先行している。東西に長く、北に四国山地、南は太平洋に面して地域ごとに課題が異なる。大学としても地域の再生と活性化を模索している」

「特に力を入れるのが、学生が地域の人と学び合うためのカリキュラムだ。1年生は活性化の事例を学ぶ地域学概論と、10人前後で現地に入り地域課題などの実態を理解するための実習を必修科目とする。2年生以降も選択科目を用意し、実践的な問題解決能力を身につけさせる実習がある」

——学生にとっても得るところは大きいですか。

「学生は社会人と接することでマナーや社会常識、交渉方法などを学ぶだけでなく、将来像やキャリア形成を考えるきっかけになっている。授業を通じて災害看護に関心を持ち高知に残った学生、自らが活動した地域を就職先に選ぶ学生もいる」

——23年度に「10年戦略」ビジョンを発表しました。

「学生が自己実現できるような環境を提供することなど、大学が目指す姿をまとめた。大学での学びと経験を生かし、学生には地域に貢献できるような社会人になってほしいと考えている」

(聞き手は富田龍一)

【関連記事】高知県立大学、初の連続講座 地域共生社会づくり支援



長戸和子教授は学生が地域に学ぶ仕組みの重要性を強調する

許諾番号30098489 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.